

墨汁一滴

映画文学人生論

原作：正岡子規 (1901) 「日本」
参考：俳諧大要 (1895) 「日本」
歌よみに与ふる書 (1898) 「日本」
病牀六尺 (1901) 「日本」
仰臥漫録 (1901) 「日本」
漱石・子規往復書簡集 (2002) 「岩波文庫」

我俳句仲間において俳句に滑稽趣味を發揮して成功したる者は漱石なり

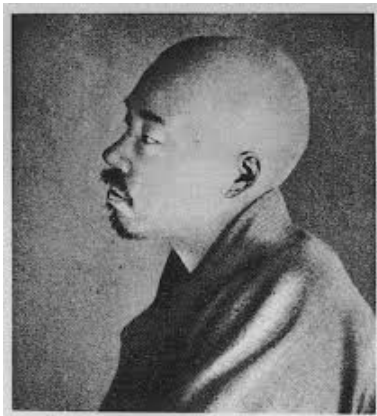
『墨汁一滴』は晩年の正岡子規が脊椎カリエスで寝たきりになりながら、言葉を一滴づつしぼり出して、新聞「日本」の明治三十四年一月十六日から七月二日まで連載した百六十四の短章からなる随筆集である。

そのうちの四章で夏目漱石をとりあげ、話題にしている。当時、夏目漱石はロンドンに留学中の英文学者で、まだ作家としては知られている存在ではなかった。しかし、子規は漱石がすでに偉大な文学者であることを知っていたらしい。

特に注目されるのは一月三十日の漱石評だ。

「我俳句仲間において俳句に滑稽趣味を發揮して成功したる者は漱石なり。漱石最もまじめの性質にて学校にありて生徒を率ゐるにも厳格を主として不規律に流るるを許さず。紫影（しえい）の文章俳句常に滑稽趣味を離れず。この人また甚だまじめの方にて、大口をあけて笑ふ事すら余り見うけたる事なし。これを思ふに真の滑稽は真面目なる人にして始めて為し能ふ者にやあるべき」。

これは五年後の「吾輩は猫である。名前はまだない」の登場の予言ではなからうか。俳句に滑稽趣味を發揮して成功した人物なら小説に滑稽趣味を發揮して成功する可能性があるはずだ。おそら



墨汁一滴

映画文学人生論

く漱石は、『墨汁一滴』を読んで励まされ、滑稽趣味を發揮して成功しそうな小説の創作を試みる気になったにちがいない。

俳句にはもともと滑稽趣味がある。子規は写生俳句を主張したが、『墨汁一滴』を読むと、子規の文章には自分自身や漱石を客観的に写生したかのようなユーモアが随所に感じられる。

たとえば、漱石がロンドンの場末の下宿屋にくすぶっている、下宿屋のかみさんが、お前はトンネルという字を知っているかなどと聞くので漱石は返答に困ったという。かみさんは黄色い猿のような文学士の能力をためしたのだろう。

子規が明治二十四年の学期末試験にそなえて大宮公園の万松楼という宿矢に泊まったら、松林の中にあって静かな涼しい処で非常に善い。それにうまいものは食べられるし、丁度萩の盛り。愉快でたまらないので。漱石を呼びにやったら漱石も来て、一、二泊した。おかげで試験の準備は出来なかったが、頭の保養にはなった。

また、高等中学にいたころ、漱石と早稲田から関口の方に向けて散歩していると、そらの水田に植えられたばかりの苗がそよいでいるのが誠に善い心持だった。ところが、漱石は毎日食べている米がこの苗の実だということを知らなかったというのに驚いたという。

病牀に日毎餅食ふ彼岸かな

正岡子規